

【制作記録】

メキシコ・ハラパにおける研究活動 「2人の日本人現代美術作家展」

遠藤 研 二

2007年11月15日から12月4日までメキシコ・ハラパにおいて開催された、遠藤研二と矢作隆一の「2人の日本人現代美術作家展」について報告します。

この展覧会はメキシコ・ハラパ市にあるベラクルス州立大学の協力の下、現地在住で本学卒業生の矢作隆一氏と昨年度金沢美術工芸大学CARKプロジェクトにより招聘されたアドレアン・メンディエタ氏の2名企画による展覧会です。ベラクルス州立大学所有の画廊でハラパ市内中心部にある[GALERIA UNIVERSITARIA RAMON ALVA DE LA CANAL]にて開催されました。大学所有の画廊としては大規模なものでスタッフもディレクターを中心に常駐しており、しっかりした体制を整えております。ベラクルス州立大学はこのほかに2つの画廊を所有しており、大学の成果を社会に還元していると言えるでしょう。矢作隆一氏は金沢美術

工芸大学の出身で、現在はベラクルス州立大学芸術学部美術科彫刻専攻の非常勤講師を勤められております。また同氏は現在、ハラパ市内で日本料理店を経営しており、その建物にはギャラリー・ネブロッサという画廊も併設され、展覧会をする作家のレジデンス施設として機能しています

私の制作は矢作氏の協力により、ベラクルス州立大学の彫刻科スタジオを借用させていただき行うことが出来ました。公立大学のため設備は貧弱で不十分でしたが、矢作氏および専任教員のウロシュ氏の協力で無償で貸していただいたことは非常にありがたいことでした。市の郊外に位置するので通うのが不便ではありましたが、バスが夜11時くらいまで通っていたので順調に制作をおこなうことができました。矢作氏の画廊から片道約40分程度です。



ベラクルス州立大学芸術学部美術科彫刻専攻スタジオ外観と内部の様子

11月15日木曜日オープニングで、2人とも厳しいスケジュールのなか時間一杯まで制作し、どうにか開催することが出来ました。矢作氏は3年間におよび市内の床屋をくまなく歩き回り、職人を写真に取り、自分の髪を刈って収集するというコンセプトチャルな仕事を発表しました。会場にはハラパ市の地図

が貼られ、どこの床屋に行ったか鑑賞者に理解できるように示してありました。

遠藤研二は往來のLED等の電飾関係を使わず、今回新たな手法の作品を制作しました。コンセプト自身は以前からの宇宙進出に関する希望を表したもので変更は無いのですが、表現手法を変えてみま

した。素材は主に鉄を使い、今回初めて一部ステンレスを使用しました。軟鋼にステンレスを使用することでステンレス溶接ビードは腐食せず、鉄の部分のみが酸化することにより、色の違いが明確になるのです。平面作品も5点ほど制作し、大きな作品を1点会場の中心に据えました。コンセプトは宇宙か

ら人工衛星が地上をカメラで捉えているというもので、滞在制作の地であるハラパ周辺（ベラクルス州全体も含む）の地形を表したものです。地図を描いたと言っても良いでしょう。タイトルは「神の目」です。矢作氏は2階に作品を展示しました。



会場風景：左は遠藤研二、右は2階矢作隆一氏の作品展示



オープニングには300人近くの鑑賞者が来場しました。企画者であるアドリアン・メンディエタ氏の挨拶を皮切りに開会の儀式が執り行われ、TV局も取材に訪れました。大変有意義な研究活動をおこ

なうことができましたと思います。

(えんどう・けんじ 共通造形センター／
ミクストメディア)